

現代国際経済と第三世界の開発

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀中, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15450

現代国際経済と第三世界の開発

堀 中 浩

1980年代の南北問題は、国際経済秩序の改革への道筋を示した1970年代とは異なり、先進国資本の支配に従属して、人々は生活苦に呻吟する状況が広がっていく、いわゆる「失われた10年」へと大きく変貌した。

「失われた10年」とはどのような時代の特徴をいいあらわしているものなのか。また70年代のあの変革と改革の意気ごみは何故に消えてしまい、質的な変化をとげてしまったのか。その要因をさぐることで、「第三世界」の今日的課題であると認識した。このように研究課題を設定してみると、これまでの南北問題の研究の方法論的な見なおしが必要となってくるように思われる。

まず、現象としての国際経済秩序の機能やその働きが、どのように変化したのかということと資本主義世界体制が、世界資本主義の発展にともなってどのように質的变化（新しい発展段階へ）をとげてきたのかという、この二者、すなわち、経済秩序の機能やそのシステムの変化（IMF体制から“サミット体制”又は“G7体制”へ）と独占資本主義の世界体制としての現在の発展段階の特質といったものとの区別を明確にしつつ、考察していかなければならない。このような問題意識のもとで、現象面での変化を調査しながら本質的变化の析出につとめた。

具体的には1970年代をこの二者の区別にしたがって分析してみると、従来展開してきた南北問題の議論と異なった論理的整理を試みた。（くわしくは、研究報告論文を参照されたい。）

1. 機能的にみると、IMF体制の崩壊によって、アメリカの優位性が崩れているにもかかわらず、IMFと世界銀行が中心になってその秩序維持のための様々な試みがなされている。

2. この危機的状況とは別に、金融資本の成長が進み、資本主義の新しい段階への発展過程が明確になってきている。

このような研究状況のなかで、とりあえず、70年代から80年代への時期を中心に、今回の研究成果をまとめることとした。ひきつづき、予定としては、発展途上国の内的要因としての開発計画の成果を課題としてとりあげることとしている。